RAKUNO GAKUEN UNIVERSITY
酪農学園大学

出会い

No.87 2023. 3.16
キリスト教委員会

上：「天使の梯子」（右：環境共生学類　自然再生学研究室　千葉　崇）

雲間から見える後光のような光は「薄明光線」と呼ばれていますが、「天使の梯子」とも呼ばれます。創世記においてヤコブが夢で見た天使の梯子の逸話が想い起こされます。

「[10]ヤコブはベエル・シェバを立ってハランへ向かった。[11]とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。[12]すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。」（創世記28章10－12節）

栄華を極めたソロモンでさえ（マタイによる福音書６章28－29節）
―― 現代社会の虚と実 ――

宗教主任・循環農学類キリスト教応用倫理学研究室　**小林　昭博**

『手放さないで下さいっ！』

獣医保健看護学類　動物生命科学ユニット　**宮庄　拓**

「卒業生へのメッセージと今年度を振り返って」

獣医保健看護学類３年　**新谷　宣愛**

アジア農業の未来を担うみなさんへ

酪農学園大学名誉教授・アジア酪農交流会会長　**押谷　一**

栄華を極めたソロモンでさえ（マタイによる福音書6章28－29節）
――現代社会の虚と実――

宗教主任・循環農学類キリスト教応用倫理学研究室　**小林　昭博**

[28]そして、着るものについて、あなたたちはなぜ思い煩うのか。野のユリがどのように育つのかをしっかりと学びなさい。労苦することなく、紡ぐこともない。[29]だが、わたしはあなたたちに言う、「栄華を極めたソロモンでさえ、これらのユリのひとつほどにも着飾ってはいなかった」。（マタイによる福音書６章28－29節［私訳］）

栄華を極めたソロモン

マタイ福音書６章28－29節は、「山上の説教」（マタイ福音書５－７章）のなかに置かれている「思い煩うな」（マタイ福音書６章25－34節//ルカ福音書12章22－32節並行）と呼ばれるテクストに含まれるイエスの言葉です。「栄華を極めたソロモン」（ソロモンの栄華）という言い回しは、繁栄の象徴として、日本でも広く知られている格言ですが、ソロモンが旧約聖書に登場する人物であることやこの格言がイエスに由来することはあまり知られてはいません。

ソロモンは古代イスラエルの王ダビデ（在位前1004年頃～965年頃）の息子であり、ダビデの跡を継いでイスラエルの最盛期を築いた王としてその名を知られています（在位前965年頃～926年頃）。彼はその治世にエルサレムに――父ダビデの悲願でもあった――神殿を建立し（列王記上５－６章）、さらに宮殿をも建設しました（列王記上７章１－12節）。また、オリエント諸国との政治的・経済的・文化的な関係を緊密にし（列王記上５章１、９－14節）、南アラビアのシェバの女王がソロモンを訪ね、その知恵と栄華に賛嘆した伝説が残されているほどに（列王記上10章１－13節）、その高名（高明）はオリエント世界に轟いていたと言われています。

もっとも、オリエント世界の碑文や文書にソロモンの名は現れませんので、聖書が伝えるソロモン治世下のイスラエルの繁栄の記述（列王記10章）は、後代になってダビデ・ソロモン時代をイスラエルの黄金時代として理想化するために創作された誇張や脚色が含まれていると考えられます。

栄華を極めたソロモンでさえ

先述したように、マタイ福音書６章25－34節は「思い煩うな」と呼ばれるテクストですが、わたしたち人間が「着るもの」に象徴される物質的・表面的な豊かさに心を奪われ、精神的・内面的な豊かさを忘れてしまっている状況を取り上げています。そこで、イエスが引き合いに出すのが「野のユリ」です。ここで「ユリ」と訳したのはkrinonというギリシャ語ですが、園芸学が専門の循環農学類の森志郎教授が「マドン

ナリリー」のことだろうと教えてくださいました。マドンナリリーはイスラエルに自生する唯一のユリであり、美しい白い花を咲かせます（写真参照）。

冒頭の引用に後続する30節において、イエスは**「だが、今日は存在していても、明日はかまどに投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装ってくださるのだから、ましてやなおさらあなたたちを装ってくださらないはずはない」**（私訳）と述べています。つまり、野のユリとは人目を引く美しい花の代表ではなく、抜き取られ、乾燥させられて、明日にはかまどに燃料としてくべられる「野の草」でしかないということです。しかし、イエスはそのような道端に生えている「野のユリ」（野の草）が持つ自然の美しさを**「栄華を極めたソロモンでさえ、これらのユリのひとつほどにも着飾ってはいなかった」**（29節）と讃美するのです。

大阪・西成のあいりん地区を訪ねて

2022年12月にキリスト教応用倫理学研究室のゼミ研修で大阪・西成のあいりん地区（釜ヶ崎）を訪れました。日雇い労働者の町（寄せ場／ドヤ街）として、日本の高度経済成長を支えてきたあいりん地区は不況や高齢化によっていっそう厳しい現実に置かれています。あいりん地区の通りからは日本一の超高層ビルあべのハルカスが見えます（写真参照）。大都市大阪の繁栄を象徴する超高層ビルのすぐ下にたくさんの野宿労働者（ホームレス）が暮らしている現実を目の当たりにし、そのあまりの落差に学生たちの顔はみるみる間に曇り、通りすがりにそこに暮らす人たちに声をかけられても、何と答えていいのか分からずに、戸惑うばかりでした。

学生たちがあまりにショックを受けているので、帰り道に大阪・心斎橋の道頓堀に立ち寄ったのですが、クリスマスのイルミネーションで輝く街並みにハイブランドのショップがひしめく大通りを歩きながら、**「栄華を極めたソロモンでさえ」**というイエスの言葉が何度も脳裡に浮かんできました。きらびやかな都市の繁栄は、かりそめの虚しい栄華でしかないのではとの思いを禁じ得ませんでした。

現代社会の虚と実

マタイ福音書６章28－29節において、イエスは人為的な繁栄はそれがたとえソロモンの栄華であったとしても、より正確にはその繁栄が大きければ大きいほど、そのきらびやかさのすぐ下には、その繁栄を下支えした人たちがそこから取り残されている現実があることを喝破しています。イエスはそのような誰かの犠牲の上に成り立つ表面的な美しさの虚（虚偽）を見抜き、たとえ明日はかまどに投げ入れられる運命にあったとしても、大地に根を張って自生する野のユリの方が遥かに美しく、そこにこの世界の実（真理）もあると伝えているのではないでしょうか。つまり、ソロモンの栄華に象徴される人為的な現象に目を奪われるのではなく、野のユリに象徴される自然の本質にこそ目を向けるように促しているということです。

卒業生のみなさんが、現代社会の虚と実を見抜き、本質を見誤ることなく、これからの人生において、大地に自生する「野のユリ」の美しさに目を留める優しさを持ちつづけて歩む未来を信じています。

『手放さないで下さいっ！』

獣医保健看護学類　動物生命科学ユニット　**宮庄　拓**

卒業生の皆さん、ご卒業、おめでとうございます。この酪農学園大学での学生生活を振り返ってみて、どうでしたか？４年間または６年間で、いろんな学んだことや経験したこと、いろんな嬉しいことや悲しいこと、辛いこと、いろんな人との出会いがあったかと思います。過ごした貴重な学生生活で得た、これらすべての学んだこと、経験したこと、出会った人は、皆さんのこれからの人生において大切な宝物となるでしょう。

さて、皆さんご存じの通り、酪農学園大学はキリスト教主義の大学です。その大学で学んだということは、少なからず、キリスト教に触れる機会があったと思います。入学時に聖書も購入されたかと思います。

ん??ちょっと待ったっ !! 今、聖書を手放そうとしたそこのあなたっ !! そんなもったいないことはしないで下さいっ !!

2,000ページにもおよぶこの聖書。実はギネスブックにも "Best-selling book" として "Christian Bible（聖書）" が挙げられています。どんなに少なく見積もっても、50億部以上売れたと推測されています。この分厚い本を初めて手にした時、この本にはいったい何が書かれているのだろうかと思った人も多くいることでしょう。

しかし、そんな『世界で最も売れた本』であっても、全てを読んだ人はそれ程多くはないと思います。ではなぜ、『世界中で最も売れた本』になり得たのでしょうか？それは、長い歴史があると言うことも理由の１つだと思います。現在の聖書は『旧約聖書』と『新約聖書』に分かれており、前半は『旧約聖書』、その成立は紀元前４世紀とされています。後半の『新約聖書』は、イエス・キリストが誕生してから、長い年月をかけて書かれた物です。

ではなぜ、この長い歴史の中で、この書物は多くのキリスト教信者が手に取り、読み続けられてきたのでしょう

か？「ある宗教の経典だから」といってしまえばそれまでですが、その答えはちゃんと聖書に書かれています。

テモテへの手紙二３章15節～17節
『[15]この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。[16]聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。[17]こうして、神に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、充分に整えられるのです。』

つまり、この聖書は「神の霊の導きの下に書かれた」ものであって、人が「どのような良い業をも行うことができるように、充分に整えられた」ものなのです。この聖書の箇所は新約聖書ですので、ここでいわれている『聖書』は旧約聖書のことになりますが、この時代でさえ、聖書は、人が「どのような良い業をも行うことができるように、充分に整えられた」ものとして読まれてきたことを示しています。さまざまな時代であっても、この聖書は、その時代、その時、その人にとって、「有益な知恵を与えてくれる」ものなのです。

私も、私自身の中で「生きる手本」と思える聖書の箇所があります。その聖書の箇所に、何度も何度も心が救われたことでしょう。私は聖書学者ではありませんので、このような言い方をすると、牧師先生や聖書学者の先生には怒られるかも知れませんが、もしかしたら、本当の意味とは違った捉え方をしてしまっている聖書の言葉があるかも知れません。しかし、そうであったとしても、私はそれで良いと思っています。苦しいときや悩めるときに、聖書の言葉が、救いや導きになるのであれば、そこには「神の御心」があると思います。

酪農学園大学の創設者である黒澤酉蔵先生も、苦難の中にあるときに、この聖書に出会い、神に導かれ、酪農学園大学を創設しました。『万有引力の法則』を提唱したアイザック・ニュートンも「聖書にはいかなる世界の歴史より、たしかな真理がある。」と言っており、また、『奴隷解放宣言』をしたアメリカのリンカーン大統領も「人間にとって望ましいものはすべて聖書のなかにある。」と言ったそうです。

皆さんも、このように、酪農学園大学で学び、聖書に触れる機会があるということは、これは単なる偶然ではなく、『神のお導き』があったことを知って下さい。皆さんも、苦しいときや悩めるときに、少しでも良いので、聖書の言葉に触れてみて下さい。聖書の言葉、つまり『神の霊』によって、その苦しみや悩みから救い出してくれる業を与えられると思います。勝手に良いように解釈しても、それはそれで良いと思います。それが救いになるのであれば、そこには『神の御心』があるのです。皆さんもどうか、これからも聖書に触れる日々を送って下さい。

「卒業生へのメッセージと今年度を振り返って」

獣医保健看護学類３年　**新谷　宣愛**

卒業式を迎えられた皆さん、ご卒業おめでとうございます。先輩方の世代は新型コロナウイルスの流行の影響で一時期当たり前だった大学生活が送れなくなり、授業は対面授業からオンライン・オンデマンドなどのネットを通じたものとなったために、ゼミ活動でのフィールドワークなども大きく制限されたと思います。そんな中でも2022年度は昨年度までと打って変わり、様々な規制も緩和され、相応しい感染症対策を行いながらの大学生活最後の１年はどうだったでしょうか。ある人は就活だったり、卒論だったり様々なことがあったと思います。

私が所属している酪農学園大学キリスト者学生会（まきば）は、コロナ禍ではありますが、感謝なことに今年度感染対策を行いながら対面で１年間活動を続けてくることができました。私たちは週１回部室に集い、賛美やアイスブレイクなどをして聖書研究を行っています。今年度の前期はブックレット「神からの贈り物」を、後期は「神が共にいる」を活用しながら聖書はどのように書いてあるか、みんなで楽しくディスカッションしながら活動してきました。一人一人個性豊かで本当に楽しいサークルです。週１の活動以外にも、新入生歓迎会、サポーターである宣教師のご自宅でお楽しみ会、クリスマス会、新年会など様々なイベントを企画して行いました。

春には新入生歓迎会を行い、たくさんの新１年生が参加してくれました。その中から何人か継続的に週１回の活動に来てくれるようになり、本当に感謝です。クリスマス会では酪農ESSと協力して合同で企画し行い、クリスマスをお祝いしました。クリスマス会も多くの参加者が与えられ、ともに賛美し、アイスブレイクでは豪華景品が準備され、大盛り上がりし、楽しい時間を過ごすことができました。また２年生のメンバーが友達を頻繁に活動に連れてきてくれて、新しい繋がりがたくさんでき、酪農にも神様の福音が浸透してことを実感することが多々ありました。

時々開催している祈り会では、メンバー同士で互いに近況を分かち合い、祈りの時を持ちながら交わりを大切にしてきました。このサークルで出会った繋がりは大学生活だけで終わること

はなく、今後卒業しても互いに支え合いながら続いていく出会いであると私は思っています。卒業される先輩方もこの４年間の大学生活の中で出会った友人を大切に、卒業しても互いに励まし、助け合い、支え合いながら日々頑張ってください。

最後に私が大切にしている聖書の箇所をご紹介して終わりたいと思います。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです」

（ヨハネの手紙一 ４章10節）

「好き」か「嫌い」という感情は、私たちの行動に影響します。「私はうどんが好きだから、昼食はうどんにします。私はそばにします」と無意識に好みで選択しています。また、服装の選び方もファッションの好みによります。また、この傾向は対人関係にも見られます。「あの人は私の苦手なタイプだから付き合いづらい」などということもよく聞きます。この感情が社会の中で大きく渦巻いていて、いやおうなしに巻き込まれることがあります。聖書の中に、「愛する」ということだけでなく、いろいろな命令形が出てきます。「祈りなさい」「喜びなさい」「感謝しなさい」。これらの教えを見るときに、人は自然体のままでは実行できないし、自分の意思を固く持ち、決断していくしかないと思います。

アジア農業の未来を担うみなさんへ

酪農学園大学名誉教授・アジア酪農交流会会長　押谷　一

学位記を受けられた修了生、卒業生のみなさま、おめでとうございます。これまでのご研鑽によるものと心より敬意を表し、アジア酪農交流会よりお祝いを申し上げます。

アジア酪農交流会は、1975年10月18日に「アジア諸国の農業並びに農村振興に関心を持つ人々の友好親善を促進し、併せて青年農学徒の育成に協力すること」を目的に、故原田勇名誉教授が設立されました。1927（昭和２）年にお生まれになった原田先生は酪農学園大学酪農学部で42年間に亘って教育・研究に携わり、日本におけるアルファルファの本格的画期的な土壌・肥料・植物栄養学的研究で優れた成果を挙げられたほか、敬虔なキリスト者でもあり酪農学園の学園長も務められました。日本だけではなく、極東ロシア、北朝鮮等なども含めアジアの多くの国々の酪農業のために酪農学園大学の「三愛精神」にもとづいた実践に取り組まれました。

現在、アジア地域の人口は42億人余り、世界のおよそ54％を占めています。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大、気候変動、都市化さらには社会の分断や格差などによって農業、とりわけ酪農業を取り巻く環境は厳しさを増しています。わたしたちにできることは原田先生の愛唱聖句でありアジア酪農交流会の目的でもある「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ（マタイによる福音書　22章37～39節）」の取り組みです。

酪農学園大学で学ばれたみなさんは、直接、原田先生の教えを受ける機会はありませんでしたが、酪農学園大学の建学の精神にもとずくアジアの農業、農村振興に生涯に亘って尽力された原田先生の志に繋がっています。あなたがたが身に付けた知識・技術と酪農学園の建学の精神を活かすためにアジア酪農交流会にご入会いただきアジア、そして世界の農業分野などの課題解決に向けて取り組まれることを期待しています。

原田勇先生はじめ諸先輩に代わってこれからの人生にエールを送ります。

＊アジア酪農交流会ホームページ：
https://asia.rakuno.org/

あとがき

『出会い』87号（卒業式号）をお届けします。未来を担っていく卒業生のみなさんの存在がこの世界の希望です。（A.K.）

酪農学園大学キリスト教委員会
〒069-8501　北海道江別市文京台緑町582番地
Tel. 011－386－1111（代表）

JIHEE since 2004 III UNIVERSITY 2020.4-2027.3
酪農学園大学は、2020年度（公財）日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価において大学評価基準に適合していると認定されました。
〔酪農学園大学公式サイト〕